

## 忘れ語り、いま語り

## 表わすこと、または創ることの、はじまりの現場へ

コロナ禍が始まった年であったか、アール・ブリュット展「満天の星には、創造の原石たちも輝く」という特別展のために、執筆した文章である。編集者からはやんわり「理解できない」と拒絶されたが、掲載しなくてもいいから書いておきたいと思い、書いた不思議な文章であった。深い思い入れがあり、ここにあらためて掲載してみることにする。ちなみに、(3)の主人公の彼には再会を果たしました。絵はいまも描き続けています、と抗議されましたが、とても嬉しい再会でした。

☆

## (1) はじまりの絵について語りましょうか

トイレの壁に、指先についたウンチで絵を描きました。  
それが、記憶のなかの、わたしが描いたはじまりの絵なのです。  
いくつかの線が交叉して、かすれ、指のウンチは尽きました。  
むろん水洗ではなく、くみ取り便所だったのです。  
床の木目には、なにかが潜んでいて、ときおりそのささやく声を聴きました。  
トイレはやはり、異界への通路であったのかもしれない。  
まだ五歳くらいの幼な子でありました。  
ウンチの匂いはいまも、指先に、なつかしく残っています。  
ときおり、あの描きかけの絵を思い出します。  
なぜ、幼いわたしは叱られなかったのでしょうか、壁を汚したのに。  
はらかな昔、洞窟の壁に描かれた獣たちの姿と、残された手の跡。  
絵とはなにか、絵を描くとはいったい、どういう行為なのですか。  
絵描きにはならず、民俗学者になったわたしは、そんな問いからは巧みに逃れてきました。

## (2) 黒い土をこねて、海の底をのぞきました

わたしは武蔵野の台地に育ちました。  
そこは畑と雑木林、そして野原の世界でした。  
土ぼこりが舞ったのは、夏でありましたか。  
雨が降ると、水たまりができて、アメンボがどこからともなく現われました。  
手や棒で地面を掘ると、三十センチほどで赤土になりました。  
その手前の黒い土が、子どもらの友だちだったのです。  
黒土をこね、水を混ぜ、まあるいダンゴをいくつも、いくつも作りました。  
そんな土の感触はいまも、てのひらの内側に残っています。  
気がつくと、土のむせる匂いも鼻先にあって、ずっと忘れていた匂いです。  
庭の隅っこには、雑木林で見つけた大きな貝の化石が、半分に欠けて転がっていました。  
そう、友だちと分けっこしたからです。  
この土がきっと、海の底に沈んでいた時代があったのです。  
だから、土をこねる人に会うと、話しかけたくなるのでしょうか。  
蒼いみなそこに、命がけで土を採りにいったカブトムシがいたんですよ。  
どこだかの、遠い国の、いにしえの物語だとか。

## (3) わたしはだれですか、と助手席のほそい声がありました

その子はそのとき、二十歳になったばかりでした。  
男でも女でもなかったのです。  
淡いラインと色合いの、消え入りそうな、葉書よりも小さな絵を描いていました。  
はかなく、無心で、見るものを畏れと憧れで揺さぶりました。  
あらゆる定義や名付けから、そっとこぼれ、逸れてゆくような絵だったのです。  
やがて、その子は性を選びました。  
男になったのです。  
かれの描く絵からは、はかなげな線と色が失われていきました。  
そして、いつしか絵を描くのをやめてしまったのです。  
かれはいま、うすく無精髭をはやした、中年の男です。  
最近、車のイラストを描いている、と聞きました。  
見せてもらったことは、ありません。  
知らぬ間に、性を選ばせるがわに加担していたことに気づきました。  
それが色のない暴力であったことに、いまも、おののくことがあります。

## (4) なぜ、落ち葉に惹かれるのでしょうか

秋、地面に散り敷かれた落ち葉を見かけると、気もそぞろになります。  
落ち葉に呼ばれます、呼ばれています。  
そっと身をかがめて、拾うと、ポケットにしまうのです。  
たいてい、そのまま忘れてしまうのですが。  
まれに、文庫本の葉になっているのを、あとになって見かけます。  
はかなく、壊れやすい、まるで永遠の否定でも企んでいるかのように。  
無用であるから、それは無償の贈与でもある、ということですか。  
だから、枯れ葉が獣に姿を変えて、こちらを振りかえったとき。  
思わず、かすかな歓びに震えました。  
打ち棄てられてゆくものに、いのちが吹き込まれたのですから。  
いま、小箱のなかに身をひそめているのは、犬と象です。  
いつか、お見せしましょうね。  
その繊細な姿態を前にして、ひとの手わざの不思議に打たれます。  
あなたは、どんな指をしているのですか。

## (5) 数字にあらがうための招待状を差しあげます

放射能という、形も色も匂いもない暴力と出会いました。  
この世は、見えないモノたちに満たされていることを知りました。  
鈍いのね、そんなことも知らずに、これまで生きて来たなんて。  
そう言って、笑ったのは年若いカナリアでした。  
けれども、数字によってしか、その見えない暴力は確認できないのです。  
どうやら、世界は数字に支配されているようです。  
あなたの話には数字が一度も出てこなかった、ポエムですね。  
どこか大企業の社長さんに、そう憐れむように、さげすむように言われました。  
わたしは数字をもたない人間なのだと知りました。  
数字の対極には、詩や絵画や音楽の王国があるのでしょうか。  
わけのわからないことばかり。  
不安はいつだって、数字に置き換えられます。  
そうして、世界は手なづけられた現実によって覆われてゆくのです。  
現実こそが、はかない夢ではありませんか。  
ポエムやアートは、数字にあらがいます。  
現実を超えようとして、カナリアのようにさえずります。  
現実は思いがけず、いくつもの顔を、いくつもの表情をもっているのです。  
だから、表わすこと、創ることがはじまる場所に、眼を凝らしています。